

皆さんは「テンセグリティ」を知っていますか？これは圧縮材が互いに接続されておらず、張力材とのバランスによって成立しているような構造システムの事をいいます。割りばしや針金ハンガーで模型を作る事ができます。本体の荷重の十倍の物を上に載せても倒れないというものです。この世界も同じです。バランスを正しく保つことができれば倒れたり流されたりしない事がわかります。

神様はこの世界を絶妙なバランスで創造されました。自然の中に身を置くと神様が造った全ての被造物の法則（バランス）を感じることができます。神様は全ての被造物を見せながら指し示す一般啓示と神様からの直接の啓示である直接啓示とで私たちに神様の存在を伝えようとしてくださいます。

今週の聖書箇所「使徒の働き14:1~22」は、今までの様に「うろこ」「覆い」という言葉が出てこなくなりますが、「うろこ」「覆い」についてふれています。

私達の「うろこ」は非常に執念深い物で、取れたと思ってもまた戻ってきます。それは、一度神様によって癒されても、私達の生き方には習慣、癖がある為です。神様はこの道を180度向きを変えて出発しろと言っています。ですから、神様に癒された後、私達のやり方も変えなければなりません。

「企てろ」何か自分がやりたいマイナス的な事に対し、自分を守るためにあたかも正しい事を言って、それによって誰かを利用して自分がやりたいことをやるという怖いやり方があります。これは、「知った人の愚かさ」です。自分が出来ないことを分っている為、出来ている人を見て「嫌だな。あの人という」感情になり、この行動に繋がっていく事があります。

何度も使徒の働きが伝えようとしている事は、私たちが人を見ようとする目線です。結果、人が自分をどう見ているかという事に繋がっていきます。

自分が嫌な目にあって、最初は自分を守る為言い訳をしましたが、いつのまにか自分が正しくて相手が悪いという記憶にかわっていくという習慣があります。

■ 迫害と二分

必ず二つの種類の人があります。神様のメッセージが語られると「聞いて受け入れる人」と「受け入れない人」そして、「受け入れない人」の中には「聞いて受け入れる人」に対して憎しみを抱くようになります。その理由が（うろこ）です。自らを守ろうとする行為は相手の排除につながります。一番良くないのは、「分かっているのに受け入れられない人は受け入れた人の邪魔をする。」ことです。そうならないでいいのでしょうか？

二分する時、そのような事が私たちの中に起こってしまいます。『弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならぬ。」と言った。』使徒の働き14:22

これは、難行苦行をすることではなく、この信じたものがこの地上の中でイエスキリストの身丈にまで成長するには訓練と痛みが伴うという事です。私達の習慣から脱出するためのプロセスとなります。神様は天地万物を造りそれを見ながら耐え忍べと言っています。

人間は傷ついても元に戻ります。治らない病気もありますが、それは私達の人生が終わるためのものですから、それ以外のものは治ります。人が作った物は時間がたつと壊れていきますが、神様が造ったものは治ります。今まで受けてきた心の傷、価値観も神様によって癒されます。一部ではなく、根本を癒されるお方です。

■ 賞賛の危険

生まれつき足の萎えた人を癒したバルナバとパウロは賞賛を受けゼウスとヘルメスと呼ばれ、神の様に扱われました。バルナバと、パウロの行ったこの場所は偶像礼拝が盛んで、この様な言い伝えがありました。「ゼウスとエルメスが人の形をしてやってきましたが、誰も泊める人がおらず、老夫婦がその二人を止めたらそこに神殿が出来、それ以外が滅びた。」それで民は二度と同じことが起こらないようにバルナバとパウロを崇拜したという事です。その事態にパウロは答えます。

『皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私達も皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこの様なむなしことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。』(使徒14:15)

「宣べ伝える」とは神の代行者という意味であって、代表ではありません。つまり私達は、神様の代行者であるということです。ですから、パウロはつづぎに、人々が自分たちへの賞賛を止めました。

私たちは賞賛を受ける事に目を向けてしまいます。賞賛を受けてしまう背景や、与えようとする背景も自らの価値観に深く根差しています。これはウロコに繋がります。

バルナバとパウロは賞賛を受けましたが、「私たちは、神の代行者であり賞賛されるようなものではない」とを伝えました。私たちは、賞賛を受ける事により勘違いし代行者ではなくになり、自分が物事を判断して制する人になりやすので気をつける必要があります。

■ 痛みから出る行動

痛みから出る行動に注意しましょう。過去の痛かった出来事を通して自分を守るために、正しい事を見つけ相手に言います。痛みから出る行動の結末は大概「もう知らない、いらぬ、辞めた」という事になります。

私たちが、痛みから出る行動を見つけたければ、困ったときにどのような行動をとるか良く分かります。痛みから出る行動は間違いを起こします。痛みから出る行動を見つけ根本を癒して下さる神様の前に出て行きましょう。

■ 直接啓示と一般啓示

木はヤギに皮を食べられても、樹液を出してまた皮を作るように植物は傷つけられても治ります。

神様は私たちが全ての万物を見る時、私達を守っている事を教えるようとしています。自然から神様を感じることを一般啓示と言います。そして直接啓示とは、文字通り直接神様を感じる事、神様の前に出る事です。私たちが苦しい時はイエス様を感じる事が重要です。しかし何か問題が起こり、神様の前に出てくることが辛い時は一度自然の中に行く事で神様の事が直接わかるようになり、神様の前に出やすくなります。

■ 迫害する側になるもの

聖書の中には迫害する側になった人たちが沢山聖書に出てきますが、そこから改まった人は少ないです。

パウロは数少ない改まった人ですが、迫害する側だった為、その後多くの迫害の道を通っていきます。信仰を持った後も、蒔いた種は刈り取らなければならない為、その道を通らなければなりません。これは、罰ではありませんが、迫害を与えてきた人生を振り返った時、自らが迫害を受けた時にその道が自らが自ら行った事だと思えます。ですから、私達は「もうそれをしない！流されない！」と決断しなければなりません。そして直接裁かなくても、相づちを打つ、同調するというのは裁いたのと同じことです。流されていたら自分の立ち位置を失ってしまいます。

■ 迫害には収穫を伴う

稲は台風のシーズンを越え、実っていきます。私たちは迫害を受ける事で強くなります。揺さぶられても、倒れはしません。神様が守ってくれるならどのような道でも大丈夫です。私たちは神様にゆだね、子どものような心で神様にくっついていましょう。

さいごに ~お祈りから~

私たちは神様が近くにいることがわからないと間違った議論をしてしまいます。いろいろな理屈や今までのやり方、その場の状況によって物事を間違えてしまいます。神様を遠く感じる時は、夜空の星や、山々の木々、川の流れを見て神様を感じましょう。神様から離れ、声が聞こえなくなると、私たちは人の言葉に耳を向けます。人に目を向けると人生を失うのが怖くなります。人の評価が私達を打ち消し、存在をも否定します。誰かが愛を持って行ってくれた言葉でさえ人格否定にしか聞こえなくなります。友が神様ではなくなっています。

嬉しい事は嬉しい、嫌な事は嫌だ。本来私たちがそれを一番願っている事ではないでしょうか？本当は嬉しい事なのに義務感になっていく為苦痛を感じる事がある為仕事が辛くなります。

主は「あなたの若い日にあなたの創造者を認めよ」と言われます。大人である私に神様を知れと言っているのではなく、子どもの心で神様を知りなさいと言っているのです。

「神様は遠くにいる」と言えば、近くにいってもその声が私達には遠くに聞こえます。そして、神様を見失うと、神様の働きを迫害するものとなってしまいます。私達と共にいて下さる神様を子どものように感じ、私たちの悪い習慣・ルーティーンになってしまっている事を「しない！流されない！」と決断して行きましょう！

(要約者:辻 総一郎)

(2020年8月9日)